

---

# ハルベスタ物語(仮)

尊花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハルベスタ物語（仮）

### 【Nコード】

N2577J

### 【作者名】

尊花

### 【あらすじ】

金と銀の龍を侍らしている女の子・あきがかっこいい男の子と恋に落ちる話。でも少しシリアスっぽい感じで。よろしくお願ひしまーす

## 序章

金と銀の龍を従えるもの  
それはすなわち地を統べるもの

――

高校の制服を着た女の子が町中の喧騒をゆつくりと歩いてい

る。  
女の子が路地裏の間をとおりすぎる寸前、路地迂路が光り始

めた。  
いつもは、そのまま気にせず家へとむかうが 今日はずが

た。  
女の子は、足を止め、 その光に向かって路地裏へと滑り込

む。

そして、女の子は光と共に消えたのだった。

町中の喧騒はそのまま、そして誰もそのことに気づかなかった



## 序章（後書き）

小説を書くの初めてなので何かありましたら教えてください

## 第一章 一話

「第一隊の準備はもういいか？」

「は、第一隊および第三隊も出動可能です。あとは、スレイ皇子の出動要請のみです。」

「ああ、わかった。ありがとう。しかし、とつとつ、このごたごたを終わらせてしまいたいな。つたく、あのくそじじいさつさとしつばを出せばよいものをなかなかださないからな。」

「ははは、皇子口が悪くなっていますよ。まあ、その通りですがね。それとくそじじいではなく、ヨールツテット伯爵ですよ。つたく、誰に似たんだかその口の悪さ（ボソツ）」

「は、そういうお前は狸だがな、ゲルよ。」

「まあ私的には、狸ではなく、狐でいきたいですね。ええ。それはともかくようやくですね。」

「ああ、そうだな。じじいを捕らえそして、我が王を正気に戻すぞ。ここが正念場だぞ。わかってるな。」

「ええ、そうですね。」

「ああ、では、行くぞつとその前につと忘れるところだった。出陣前の景気づけの演説つと、ああ んどくせえな。つたく、やるしかないか。」

「ええ、演説は隊の士気をあげますからね。よろしくお願いしますね。スレイ皇子。」

「ああ。皆のものよく聞け、ヨールツテット伯爵は、我が王を亡き者にしようとの行為があつた、これは反逆行為であり、これを罰しねばならぬ。よいか、ヨールツテット伯爵を捕らえそれ相應の罰をあたえねばならぬ。いくぞ。」

その夜一つの肅清の謙虚があつた。

そして物語が始まる。

## 第一章 二話

闇にまぐれ、皇子の隊が馬に乗り颯爽とヨールツェット伯爵の館へと突き進んだ。そしてヨールツェット伯爵の館に着きスレイが命令を隊へと命令を下す。

「館のヨールツェットとお伯爵そして伯爵の血筋の者及び執事はとりおさえよ。そのほかは逃がせ、だがもし抵抗した場合切れ」

第一隊が二手に分かれ館の一階と二階へと突き進む。悲鳴が闇と紛れて聞こえてくる。第三隊は、松明を持ち、重要人物が逃げぬようと館の周りを固めている。

ゲルは、スレイ皇子と行動をともし様子を見守る為館の玄関付近にいた。が、何かしら気の流れの様子がおかしいと感じた。

「スレイ皇子この地下の気の流れが変です。」

「それはどういう意味だ？」

「地下に気がよどんでいるように感じられます。押さえ込まれているような。うまく様子を伝えることができませんが。」

「ふむ、この国一番の魔力の使い手がいうのだからそうなのだろう。では

何かあるな。いってみるか。地下のどのあたりか場所は分かるか？

「

「ええ、分かります。こちらに地下へと向かう階段があるは

ずです。それに館の地図は頭に入っていますのでご安心を」

「ああ、頼む。」

そしてスレイとゲルは、地下へと向かうべき階段を降りていった。

## 第一章 二話（後書き）

うう、まだ主役がでてこない。。。次には出てくるとおもいます。  
。。。がんばります

## 第一章 三話

通路の壁にある蠟燭の火がゆらゆらと揺れる。ゆつくりと二人は警戒をするように通路を突き進んだ。その通路の終わりに大きい扉があった。

「スレイ皇子。この部屋から感じますね。」

「わかった。もしかしたら敵の襲撃があるかもしれん、気を引き締めていくぞ。」

「ええ、危険ですので、私が扉を開けますね。」

そして、ゲルが部屋の扉を開けた。

その部屋は、薄ぐらかった。燭台がところ所のにあり、かろうじて中の様子がわかるくらいだ。部屋の真ん中に魔方陣 が大きく描かれていた。そこまでは普通だ。なぜなら、魔方陣を地下に引くことで、己の秘密が暴かれにくくなるからだ。

だが、今回ののは普通ではなかった。そこには、少女がいた。裸

の少女が手と足を天井から布のようなものでつり下げられ、その少女の膝が大きく開かれており彼女の大事な花弁がみえていた。そして、目隠しがされていた。

「変態じじい決定だな。まったく最低だ。」

「ええ、その通りですね。ここまで最低だとは思ってもありませんでした。女性にはやさしくすべきものをこのように辱めるとは、許せません。」

「ああ、この少女を下ろしてやるつ。」

スレイが腰にある剣をとった。

気がつくとも目隠しをされつり下げられているとあきは思った。自分が裸になっているのはそれからだ。早くここからでなければいけないという警報がなっている。だが、手足が自由に効かないので動けずにいた。早くここから出てあの子たちを止めなければ。私がいなくなつてあの子たちきつと人を襲う。それは止めさせなければ。ずっとあきはそのことばかりに意識を傾けていた。すると、いきなり扉が開いた音がした。二人の男の声がすると思つた。いきなり自分の体がふわっと浮いた。そして何か布で私の身体が

覆われたそう感じた。そして手足が自由になったのだと気がついた。急いで目隠しをとってみると、二人の男が目の前に立っていた。あきが最初に思ったことは二人とも美形だということだ。

「あなた・・・」

「名はなんという？」

スレイとあきは同時にしゃべっていた。

「私の名前はあきです。あといま何日ですか？」

「あきというのか。いまは18日だぞ。それがどうかしたのか？」

スレイはあきとしゃべりながら不思議な感覚を胸に感じていた。そして何よりこの少女の見目がめずらしかったのだ。少女は黒髪黒目をしているし、肌の色も象牙色なのだ。今まで見たことのない不思議なオーラを少女は身にまとっているし、そしてその目はとても魅力的で神秘的な目をしているなど場違いなことを考えていた。そんなことを考えていると、あきがはなしかけてきた。

「18日！なんてこと。ってことはあれから5日たっているってことよね（ボソボソ）。。。。あのお、この5日間で何かおかしなこと起きませんでしたか？」

「この5日間ですか？」

するとゲルが横から口を出してきた。

「そうですね、森の気がだんだんと濃くなって、そして闇がざわついていますね。」

「やっぱり……あなたたちはだれですか？教えてください。」

「おれはスレイそしてこっちがゲルだ。」

「皇子ちゃんと要った方が良いでしょう。ったく、このかたはハルベスタ王国の第一皇子スレイ・フェル・ロマレス・ハルベスタ様です。」

「ハルベスタ国の皇子ってこと？」

「ええ、そうですね。あきはスレイ皇子のことをご存じないのですか？」

「え、ええまああんまり詳しくわなないです。あのここからハルベスタの城の城門までどれくらいかかりますか？教えてください。」

あきはとてもあわてていた。その様子をスレイとゲルは何かあると感じ取っていた。だが、表面上はなにないふりをしていた。

「ここからだとい刻判だな。」

「おねがいます、急いで城間までつれて行ってください。あなたは皇子ですね、ここに兵を引き連れてきたのではないのですか

？このままでは間に合わない。おねがいします。私を信じてつれて  
いってください。じゃなくては、たくさんの方が死んでしまう。」

あきは必死にスレイとゲルに頼み込んだ。

「なんのことをいっているんだ？ちゃんと聞くから説明しろ。」

スレイの声が陰しくなった。



**第一章 三話（後書き）**

一刻半は2時間半ですね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2577j/>

---

ハルベスタ物語(仮)

2010年10月9日08時23分発行